

## 日本超高層建築の父・郭茂林

講談師 一龍斎貞花



日本最初の超高層建築霞が関ビルを完成させた郭茂林。完成当時「巨塔の男」、空を拓く茂林」と新聞で紹介されましたが、余り知られていません。

超高層ビルに使用される電材品は、どれくらいの量でしょうか。

「茂林君、台湾にいるより日本に行つた方が、君のプラスになるよ」

台北工業建築科、現在の国立台北大学を卒業という時、郭の能力を見抜いた日本人の校長先生が、  
「鉄道省（現在のJ R）から求人があるぞ」

「有難うございます」  
「台湾こそ自分の技術を生かす道」と、台湾へ渡り烏山頭ダムを造つた八田興一と逆です。

一九二二年（大正十年）、日本統治

時代の台北市に生まれ、第二次世界大戦が始まる前の昭和十五年、十九歳の時東京へ。鉄道局の建築課長のもとで図面を描いていたが、割り当てられた仕事ばかりで少しも面白くない。

「建築デザインを本格的に勉強したい」  
郭の望みを知つた課長が、

「私の同級生で、日本近代建築デザイン学を確立した、東大の岸田日出刀教授を紹介してあげよう」

「郭君、今助手の採用枠がないから別の先生を紹介しよう、どうかね」

「私は、先生のもとで勉強したいんです」と、毛筆で岸田教授に学びたい旨を切々としたため送ります。

郭の熱意に三方月後、  
「研究助手として採用する。但し東大の教職員は総て公務員、日本の公務員

は、日本人しか駄目だ」

「日本人しか、ダメなんですか」

すると内田学長が、

「日本国籍に帰化したらどうだね」

「ハイ、先生のもとでどうしても勉強したいです。郭の名字を変えないでもよければ帰化します」

名字を変えない条件で日本に帰化し、岸田教授と吉武泰水教授の下で、昭和十八年から二十六年まで東大の研究室に。この間びつしりと技術を学んだかという、岸田先生は、

「建築のことは私の本を読めばいい、講義に出なくてもその先生の書いた本をよく読んでおけば大丈夫だ。私について来なさい」

と、よく教えられたのが人間学であり、社会学でした。  
抱持ちでお供をすると、

「私の横で、黙つて話を聴いていなさい」

著名な方と、話し合いをされるその脇で、じつとやりとりを聴く。

「いいか、相手がどんなに偉くてもものおじしてはいかん。その人が言っていることが、本物かどうかよく聴いて判断するんだ」

こうして先生の対応ぶりから、人を見る目、全体を見る目、本物を見極めることを学び、各界一流のエリートたちとの交流が生まれ、強力な人脈となつていったのです。

「施主と建築家の関係、お金を出すお施主様だからといって、主従の関係ではない。施主は金を出し、建築家は知恵を出す。対等なんだ。遠慮することなく自信を持って提案すれば、必ずその仕事は成功する」

ということを学び、それがその後の郭茂林の仕事に成功をもたらしていたのです。

岸田教授は、東京帝国大学建築学科の実力者で、東大安田講堂の建築をはじめ、多くの研究者や建築家を育て、日本を代表する丹下健三も弟子の一人、郭は丹下健三と兄弟弟子です。

そして建築計画学を初めて確立した吉武教授のもとで、学校・図書館・病院といった公共施設の設計から、住宅公団のモデルプランまで、二人の実力者のもとで十八年間過ごし、そこで蓄積したノウハウが大きく役立っているのです。

岸田教授は、我が国ゴルフの先駆けといつてもよいほどで、全国に行く度お供をし、決してゴルフをする。なにしろ昭和20年、戦局は厳しくゴルフ場はサツマイモ畑に代わっていたが、「サア、やろう、やろう」と、岸田教授は平気でプレー。敗戦濃厚という時にもかかわらず実に豪放な先生。

昭和39年、第一回彰国社ゴルフ大会、スコア表によると、武蔵カントリーク

ラブ31人参加、うちシニア10人。岸田先生65歳でハンデ12、なんとワンハーフ廻り127。郭は53歳でハンデ8、122でベスグロ。教えを受けてメキメキ上達し、先生を追い越しハンデ3にまで上達。昭和20年代のゴルフは今と違って政財界トップクラスの人達に限られていて、ゴルフを通して築いた人脈も大いにプラスになっていきます。

### 江戸英雄氏に高層建築提案

この頃からクラブを握っていた方もいらつしやると思います。

当時日比谷三井ビルが、山下寿郎事務所の設計、鹿島建設の施工で進められていたが、敷地に中庭を作ることが出来ず困っていた。そこで鹿島の今井副社長が、同級生の吉武教授の処へ、「なにか、いい案はありませんか」「そうですね。郭君、案を作ってみなしか」「ハイ」と、スケッチを。

このプランを見た、三井不動産の労組初代委員長の中井武彦が、

「ウーム、中々ユニークな考えを持った人だ。郭さん、日本橋三井本館前の三井第三別館の設計をお願いしたい」

当時31メートルの高さ制限があり、天井の高さを工夫して通常の九階建てを十階建てとし、一階をオープンスペースにし、その1/3を自動車の乗り入れができるように設計、昭和三十年代半ば、今のような自動車社会ではなかったが、これからは必ず自動車時代がくると見込しての設計。使い易いようにとオフィス内の柱をなくすなど、この素晴らしい設計手腕が評価され、三井不動産建築顧問に就任。

その頃オフィスビル建設計画があり、そんな夏のこと、軽井沢でゴルフ。三井不動産江戸英雄社長もゴルフ好きで、東京までの帰りの車中、「江戸さん、日本は新幹線開通、東京オリンピックと、今発展途上です。これからは、高層ビルを建てる必要があります。31メートルの高さ制限があります。高いビルは建てられません。地震国日本とあって、高層建築は心配かと思いますが、必ず地震に強い高層建築を設計します。大きく発展するため

には、高さ制限をなくして高層ビルを建てることです」

郭の熱弁に、江戸社長も、「ウム、全くその通りだ」と、意気投句。

当時、東京虎ノ門の二千坪の敷地に、オフィスビル建設計画があったものの、不景気で一年間計画がストップしてしまった。

その後敷地は五千坪になったが、中々まとまりません。鹿島から「郭さん、なにかいい考えはありませんか」「それには高さ制限を撤廃し、高層ビルを建てることです」

江戸英雄は、当時の河野一郎建設大臣に、「このままでは日本は置いていかれます。高層建築を建てて世界と肩を並べることです」

熱弁をふるい、交渉を重ね、郭も建設省や、東京都に出掛け交渉を重ねたが、そこにも岸田・吉武両先生の人脈が大きな力となりました。

31メートルの高さ制限・これでは九階建てしか建てられない。いよいよこれより郭の活躍は、次回のお楽しみ。